

中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の研究
－『大乘莊嚴經論』第VI章「眞実品」を中心として－

仏教学専攻 早島慧

目次

0. 序論

0.1 問題の所在

0.2 『大乘莊嚴經論』「眞実品」について

本論

1. 『大乘莊嚴經論』「眞実品」の研究

1.1 『大乘莊嚴經論』「眞実品」の構造

1.1.1 五種の advaya と勝義の特徴 (k.1)

1.1.2 無我説と修行道 (kk.2-5)

1.1.3 勝義・智慧と修行道 (kk.6-10)

1.1.4 小結

1.2 『大乘莊嚴經論』「眞実品」における二諦説

1.2.1 二諦説と勝義的智, 勝義智

1.2.2 二諦説と菩薩道

1.2.3 小結

1.3 小結

2. 中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の変遷 — 『大乘莊嚴經論』「眞実品」以前 —

2.1 初期中観派の二諦説

2.1.1 『根本中論頌』「観四諦品」における二諦説

2.1.2 『無畏論』・青目釈『中論』・『仏護注』における二諦説

2.1.3 小結

2.2 『菩薩地』「眞実義品」における Pre-三性説的二諦説

2.2.1 『菩薩地』「眞実義品」における二諦説

2.2.2 『菩薩地』「眞実義品」の眞実と『大乘莊嚴經論』「眞実品」の勝義

2.2.3 小結

2.3 小結

3. 中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の変遷 —『大乘莊嚴經論』 「眞実品」以降 —

3.1 『中辺分別論』における Post-三性説的二諦説

3.1.1 『中辺分別論』 「眞実品」における世俗諦と三性説

3.1.2 『中辺分別論』 「眞実品」における勝義諦と円成実性

3.1.3 小結

3.2 中期中観派の二諦説

3.2.1 『般若灯論』 「観四諦品」における二諦説

3.2.2 『思摂炎』 「求真実智章」における二諦説

3.2.3 『入中論』 「現前地品」における二諦説

3.2.4 小結

3.3 小結

4. 結論

0. はじめに

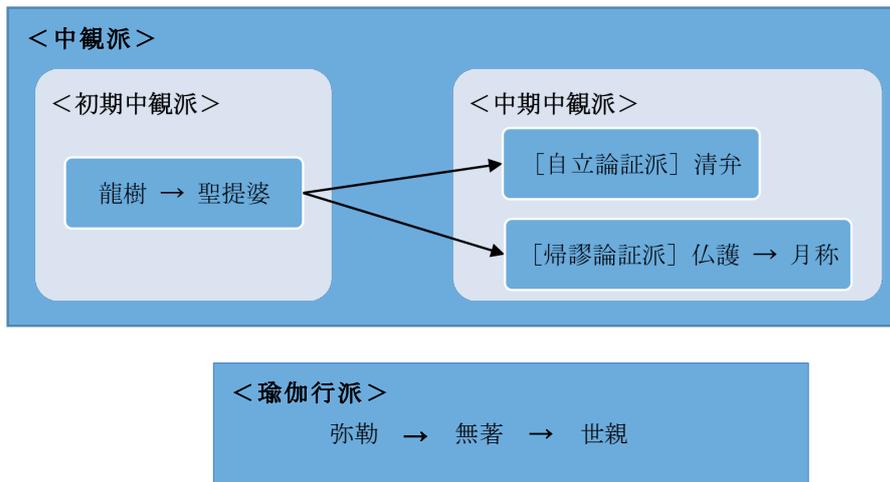
本学位請求論文は、インド大乘仏教の二大潮流といわれる中観派と瑜伽行派との関連性に注目し、2-7世紀のインド大乘仏教における思想史全体の再構築を主題とする。

中観派と瑜伽行派は従来、相反する別系統の学派として理解されてきた。中国、チベットにおいて両派は相反する学派として伝承され、事実両派はインド大乘仏教の正統性をめぐる激しい論争を繰り広げてきた。従来の研究も両派が相反する学派であることを前提とした上で、両派の論争・相違点を中心に研究が積み重ねられている。

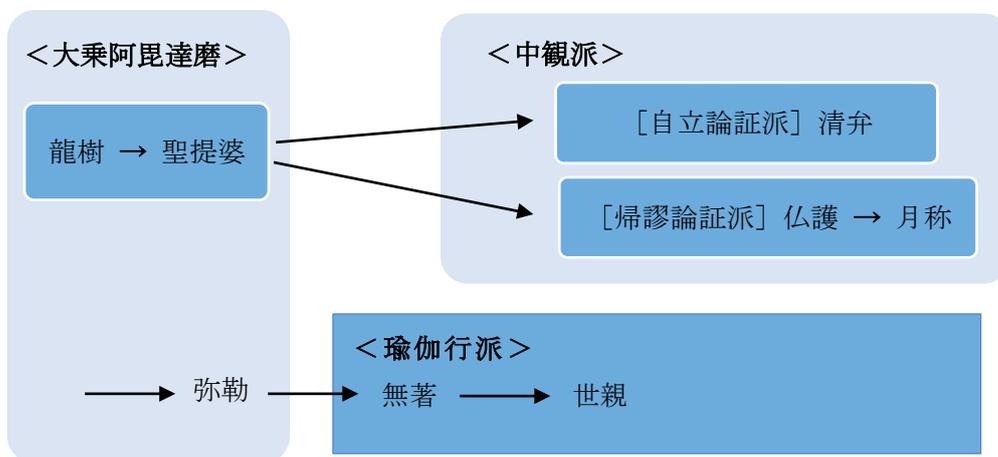
しかしながら、近年両派の関連性は見直され始めている。初期中観派と瑜伽行派の初期文献の共通点が注目され、両派を全くの別系統の学派と見なすのではなく、同一の宗教運動から発生した学派として見なす傾向になりつつあるのである。

特に Saito[2006]、斎藤[2012]は、中観派の祖師として位置づけられる龍樹 (Nāgārjuna, ca. 150-250) を、中観派の祖師としてのみ理解するのではなく、後の中観・瑜伽行両派に対して大きな影響を及ぼす、両派が成立する以前に、初期の八千頌系の<般若経>に基づいて、「大乘のアビダルマ (Mahāyānābhidharma, 大乘阿毘達磨)」を確立した最初期の論師として位置づけるのが相応しいと指摘する。これはつまり、中観派と瑜伽行派とが全くの別系統なのではなく、「大乘のアビダルマ」という同一の思想・宗教運動から起きたものとして、両派を捉える理解である。このような近年の理解と従来の理解は、次の様に図示される。

従来の理解



近年の理解



ただし、このような近年の学界の動向は、あくまでも両派の形成以前に注目したものであり、両派形成以降は、従来通り別系統の学派として理解されている。瑜伽行派成立以降の両派の関係については、中期中観派の瑜伽行派批判に代表される相違点が注目され、瑜伽行派、中期中観派の影響関係については、十分な研究がなされてきたとは言い難い状況にある。本稿は、両派に共通して重要な思想である二諦説解釈の変遷に着目し、龍樹の二諦説から瑜伽行派の三性説へ、三性説成立以降の瑜伽行派の二諦説から中期中観派の二諦説へという一連の思想史展開を考察する。

第1章 『大乘莊嚴經論』 「真実品」の研究

中観・瑜伽行両派の二諦説解釈の変遷において、『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrālaṃkāra

[*-bhāṣya*] : MSA[-Bh)] 』第 VI 章「真実品」の二諦説解釈は、一つの重要な転換点として位置づけられる。本章ではその二諦説の特徴を、MSA-VI の構造との関連から明らかにした。

MSA-VI は kk.6-10 において瑜伽行派独自の修行道、五道が説かれており、従来の MSA-VI に関する研究は、この修道論に関するものが中心であった。これに対して本稿は、MSA-VI 全体の構造に注目し、MSA-VI は、まず[1]体得すべき勝義が説かれ (k.1) , [2]世俗のあり方にある衆生が、何故にその勝義を体得可能であるのかが説かれ (kk.2-5) , そして最後に、[3] その勝義を体得するためになすべき修行道、五道が説かれる構造であることを指摘した。この構造をふまえると、MSA-VI は勝義を主題として、その勝義が如何に体得されるかを三性説に基づいて説いた章であると理解される。

そして、MSA-VI における勝義は、注釈に基づけば、[i]対象としての勝義（真如・法界）と[ii]それを対象とする智（無分別智・勝義智）の二種であると考えられる。これは、MSA-VI が二諦説を三性説に基づいて解釈し、本来的に勝義ではない智を二次的な勝義として位置づけたものと理解される。従って、MSA-VI における二諦説は「世俗→勝義智→勝義」という階層的な二諦説と考えられるのである。なお本稿は、このような「二次的な勝義」を認める「分類された階層的二諦説」を、便宜上 Post-三性説的二諦説と名付けた。

第 2 章 中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の変遷

—『大乘莊嚴經論』 「真実品」 以前 —

第 2 章では、MSA-VI 以前の中観・瑜伽行派の文献を考察し、MSA-VI に確認された Post-三性説的二諦説の特徴が、MSA-VI 以前の文献においては確認されないことを指摘した。

龍樹造『根本中論頌』や初期中観派の文献において世俗、勝義は両者ともに分類されることはなく、「二次的な勝義」も認められず、「二次的な勝義」も「階層性」もこれらの文献には確認されない。

そして、MSA-VI 以前、三性説成立以前の瑜伽行派の文献として『菩薩地 (*Bodhisattva-bhūmi* : BBh) 』第 IV 章「真実義品」における二諦説を考察し、BBh-IV には Post-三性説的二諦説の特徴が確認されないことを指摘した。BBh-IV には、初期中観派において重視された二諦説が意識されながらも、そこに中観派が否定する仮説の所依を認める独自の二諦説が説かれる。このような仮説の所依を認める二諦説は後の三性説形成に関連する二諦説であり、本稿ではこれを Post-三性説的二諦説と区別して、「Pre-三性説的二諦説」と便宜的に命名した。

BBh-IV は、初期中観派における主要術語を発展的に解釈したものである。そして、そこに説かれた思想が MSA-VI において、さらに発展するものと考えられる。二諦説に関しても、中観派の二諦説を前提として Pre-三性説的二諦説を導入し、それが後の三性説形成へと

発展するのであり、一連の思想史的文脈として二諦説から三性説への思想発展が位置づけられる。

第3章

そして最後に、MSA-VI以降の文献における二諦説を考察した。MSA-VIにみられた Post-三性説的二諦説は、『中辺分別論 (*Madhyāntavibhāga[-bhāṣya]* : MAV[Bh])』において発展的に受けつがれ、それが中期中観派の二諦説解釈へと影響することを明らかにした。

MAV-IIIは二諦説を根本真実たる、三性説に基づき解釈し、それぞれ三種であると説く。MAV-IIIは本来的に勝義である真如のみならず、涅槃・道を勝義と説く。これは「二次的な勝義」を認める二諦説と考えられるが、MAV-IIIのみならず、本来的に世俗諦でないものを設定し、世俗についても分類された階層的な構造と理解している。これはMSA-VIにみられた Post-三性説的二諦説を発展的に継承したものと理解される。

そして、中期中観派の文献にはそれ以前の中観派の文献には確認されない、「二次的な勝義」、「分類された階層的な二諦説」が確認される。これは中期中観派に Post-三性説的二諦説が影響を及ぼしたことを意味すると考えられる。清弁の『般若灯論』第XXIV章、そして『思釈炎』第III章には、本来的に勝義ではない智慧を勝義とする「二次的な勝義」が確認される。これは「分類された階層的な二諦説」であり、Post-三性説的二諦説の影響を受けたものと考えられる。さらに、月称の『入中論』第VI章には「二次的な勝義」は認められないものの、世俗に「世間からして虚偽」と「唯世俗」という、「本来的には世俗諦ではないもの」を二諦説の構造に導入する「分類された階層的な二諦説」が確認される。これは月称以前の中観派の二諦説解釈には確認されないものであり、直接的な関連は裏付けられないものの、Post-三性説的二諦説からの影響であると推測される。つまり、中期中観派は瑜伽行派の三性説を批判する一方で、瑜伽行派の Post-三性説的二諦説の影響を受けて二諦説を解釈したと考えられる。

結論

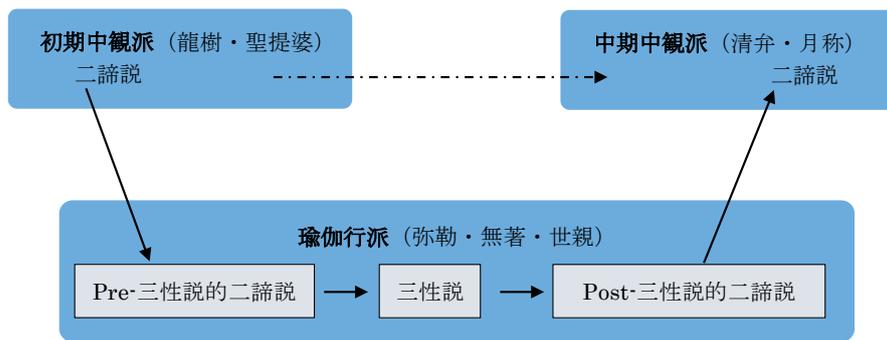
以上の考察から、中観・瑜伽行両派を通じて重要な思想である二諦説が、一連の思想史的な文脈に位置づけられ、MSA-VIにおける二諦説がその一つの重要な転換点であることが導き出される。

初期中観派が重要視した二諦説は、BBh-IVにおいて仮説の所依を認める二諦説 (Post-三性説的二諦説) として受けつがれ、それが後の三性説の形成に関与する。そして、三性説

成立以降に瑜伽行派は、自派の根本真実である三性説に基づき、智慧・菩薩道との関連から「二次的な勝義」を認める「分類された階層的な二諦説」として二諦説を解釈する。中期中観派は瑜伽行派を激しく批判する一方で、その瑜伽行派の二諦説解釈の影響を受けて二諦説を解釈するのである。

つまり、少なくとも二諦説の解釈に限定すれば、両派は相反する学派である一方で、一連の思想的文脈のなかに位置づけられるべきである。本稿の結論は次のように図示される。

本稿の結論



参考文献

斎藤明 (Saito, Akira)

- [2006] "Is Nāgārjuna a Mādhyamika?", 『法華経と大乘経典の研究』, 山喜房佛書林.
- [2012] 「中観思想の成立と展開 —ナーガルジュナの位置づけを中心として—」, 『シリーズ大乘仏教 6 空と中観』, 春秋社.